

2024年5月17日  
報道関係者各位

サスメド株式会社

2024年5月17日に開催された第125回日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会総会・学術講演会におきまして、堀井 新先生（新潟大学大学院医歯学総合研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野 教授）より、持続性知覚性姿勢誘発めまいに対する認知行動療法アプリ（以下、「本アプリ」）について発表がありました。当社は、今後、新潟大学と共同で本アプリの開発を推進していく予定です。

<持続性知覚性姿勢誘発めまい（persistent postural perceptual dizziness：PPPD、以下「PPPD」）について>

PPPDは2017年にめまいの国際学会であるBarany学会から診断基準が発表され、WHOの国際疾病分類(ICD-11)に新規記載されためまい疾患です。慢性めまいの原因疾患としてPPPDは最多で、3カ月以上持続する浮遊感、不安定感、非回転性めまいを主訴とし、症状は立位、能動的あるいは受動的な体動、動くものや複雑な視覚パターンを見た時に増悪することを特徴とします。

<PPPDの治療について>

PPPDの治療法として、薬物治療や前庭リハビリテーション、認知行動療法の有効性が報告されています。薬物治療においては、めまい症状や日常生活支障度の緩和に有用である一方で、副作用出現率の上昇とともに治療継続率が低下する傾向があり、適切に副作用をコントロールすることが重要であると考えられています<sup>1)</sup>。認知行動療法（CBT）については、PPPDの病態に既存・併存の不安や抑うつが大きく関わっていること、視覚・体性感覚情報に関する認知に歪みがあること、病態の維持に回避行動が関与していることなどから、有効性の期待できる治療法の1つとされており、今回の学術講演会での発表でも少なくとも薬物療法と同等の有効性が示唆されています。

<PPPDに対する本アプリの臨床的意義>

認知行動療法は、PPPDの有効な治療法であり、薬物療法特有の副作用が見られないといった利点もありますが、現時点では、精神科医や公認心理師などの専門職の対面による介入が

必要なこと、実施に時間がかかること、保険適応がないこと、などから日本では限られた施設でしか行われていないといった状況があります。本アプリを用いることによって、限られた医療資源を有効活用し、より多くの患者に認知行動療法を届けることが期待されます。

<今回発表があった学会について>

第 125 回日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会総会・学術講演会

宿題報告：持続性知覚性姿勢誘発めまい（PPPD） -基礎と臨床-

演者：堀井 新 先生

1) 八木千裕,森田由香,北澤明子,山岸達矢,大島伸介,泉修司,高橋邦行,堀井新 日耳鼻 124: 998-1004,2021